

りびんぐらいぶず 令和元(2019)年5月第1号

歡喜讚仰せしむれば

ご讚題

阿弥陀仏の御名をきき 歡喜讚仰(さんごう)せしむれば
功德の宝を具足して 一念大利無上なり

(Ref『讚阿弥陀仏偈和讚』第三十首 註釈版 P561)

たとひ大千世界に みてらん火をもすぎゆきて
仏の御名をきくひとは ながく不退にかなふなり

(Ref『讚阿弥陀仏偈和讚』第三十一首 註釈版 P561)

はじめに

令和はじめての月が明けました。

令和の元号でまず思い浮かぶのは、「和讚」とは「麗しき和らげ誉め歌」であり、「和らげ誉めしめる」如来様のはたらきであります。中西 進先生によれば「麗しき」とは、整っているありさまと承りました。平面的ではなく、構造的に整っているところに大きな意義が窺われます。

さて、浄土真宗のお法りを海外や現代社会にお伝えするにはプラクティカルな次元で教学の再構築が必須であると指摘して参りました。

先月は、荒削りながら浄土真宗の三大課題を取りあげ、その克服法につき愚案を提起致しました。ここで重要なのは、構造的論理鍛錬です。今日宗門系の学問の弱点は、記憶体系学に傾き、石田慶和先生亡き後宗教哲学的方法論が消え去ったことです。悲しいことです。

ぜひとも若い学徒様には勇気を以てその壁を打破して戴きたいことです。

歡喜讚仰で諸仏の讚嘆行が衆生に許される

『讚阿弥陀仏偈和讚』第三十首は、まことに示唆に富んだご和讚と窺われます。

第一に、伝道の人、曇鸞大師は、經典の御文「歡喜踊躍(かんぎゆやく)」を「歡喜讚仰(かんぎさんごう)」と展開されました。

これによってお念仏が平面的な信心獲得後の「報恩感謝」の位置づけから、「讚仰」と言う衆生に許される大行を通してダイナミックに信心獲得を実感する体験的道行き(論理的道行きであって時間的前後関係を意味しません)が明らかになり、更に、お念仏を通してする伝道の意義さえも明確になったことです。

ご和讚の出拠は大經流通分であり、そこでは「乃至一念」は、衆生にも許されるお念仏という「行の一念」だったからです。すなわち、

「仏、弥勒に語りたまはく、『それかの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念せん

ことあらん、まさに知るべし、この人は大利を得とす、すなはちこれ無上の徳を具足するなりと、このゆゑに彌勒、たとひ大火ありて三千大千世界に充滿すとも、かならずまさにこれを過ぎて、この經法を聞きて歡喜信樂し、受持読誦(どくじゆ)して説のごとく修行すべし、ゆゑはいかん、多く菩薩ありてこの經を聞かんと欲すれども、得ることあたはざればなり、もし衆生ありて、この經を聞くものは、無上道においてついに退轉せず、このゆゑにまさに専心に信受し、持誦(じじゆ)し、説行すべし」と。

經典の御文「歡喜踊躍」は、曇鸞大師の『讚阿彌陀仏偈』では、「もし、阿彌陀仏の号(みな)を聞きて、歡喜し讚仰(さんごう)し、心歸依すれば、下一念に至るまで大利を得、すなはち徳の宝を具足すとす」と(Ref 七祖注釈版 P169)ありますので「歡喜讚仰」と展開されたことが明らかだからです。

經典に「かの仏の名号を聞くことを得て、歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん」とあるのは、「かの仏の名号のお謂われを聞き、諸仏如来が行ずるお念仏の声をお聞かせに与って、歡喜踊躍して自らも又これに習って(隨念)お念仏してみたい思いに駆られて「乃至一念」というお念仏を行ずることを意味します。

そのお念仏を曇鸞大師は「歡喜讚仰」と謳い上げられたのです。「讚嘆」を「讚仰」と展開して下さった意義は甚大です。

それは、大經十七願では、「設我得仏 十方世界 無量諸仏不悉咨嗟 稱我名者 不取正覺(たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、悉く咨嗟して、わが名を稱せずは、正覺を取らじ)」でしたから、標拳の「諸仏稱名の願」のままでは讚嘆行は諸仏にのみ許される行であったものが、広く衆生にも許される行になったからです。

こうして「歡喜讚仰」というお念仏の性格は、「聞名」を目的として精神を最高度に研ぎ澄ませて行ずる Manasikāra という三昧行を意味することになります。

この三昧行は聞名を目的としているのですから、論理的に釈しつつ捉えますと、「称えれば直ちに衆生(私)の上で諸仏讚嘆の大行が働き出され、直ちに聞こえて下さる南無阿彌陀佛こそは、阿彌陀様そのお方のお喚び声(本願招喚の勅命)だったと捉えて差し支えないことになるのであります。

次に、親鸞聖人のご和讃により、「しむ」の三義が明らかになり、浄土真宗の浄土真宗たるお法りの構造が明らかにされたことです。

「しむ」の三義とは何か。

如来様のお育て(使役)、衆生が自らの姿を顧みる謙讓、その上で改めて如来様の眞實をまことまことと讚仰(尊敬)する二種深信の構造です。私を念仏する身に育て上げ(使役)、お粗末な私を(謙讓)してご縁に与らしめ(そのような受け止めに恵まれるのはお育ての極致)、されば尊い如来様のまこと(尊敬)(広島弁で「まことよのう、まことまこと」と申します)と、つ

いに振り返ることができるからです。ですので、これを「令(し)むの三義」と申すことができるのであります。

念仏する身にまでお育て下さる仏様の働きを衆生の側から頂戴し直しますと、如来様のお目当て(私の姿)と如来様のまこととを構造的に頂戴させるのが他力のみ教えの本質だったということができるのであります。

最後にご和讃の意味をお復習い致しますと、

「阿弥陀仏の御名を聞き」とは、諸仏如来(今生ではお釈迦様)がお説き下さる阿弥陀如来のお名号のお謂われ、阿弥陀様の本願の物語をお聞かせ戴き、お釈迦様から七高僧を経て親鸞聖人にお伝え戴き、妙好人、近くは我らが父祖の姿で伝えられた讚仰のお念仏をお聞かせに与り、歡喜讚仰(既述)し奉りますという、お粗末な私の胸の裡にさえ、如来様のまことのお心が清らかな宝石となってお宿り下さるのであり、私が称えせしめられるたった一声のお念仏にさえ、この上ないご利益が賜ることであります。

「大利」というのは、この上ないおさとの身ですから、浄土往生して仏のおさとの身を賜ることだと頂戴するのが本来でありましょう。

ですので、今生でご縁が開かれ本願のお念仏を賜るときには、それがたった一声のお念仏であったとしてもついに浄土往生しておさとの身が約束されると頂戴することができます。

第三十一首を拝読しますと、生まれ変わり死に変わりしてたとえどのような大千世界に赴こうとも、阿弥陀仏の御名を聞くことができるひとは、永遠に正定聚不退の位に就かしめられると頂戴できることでもあります。合掌。

仏教壮年会お聴聞の会 令和元年五月五日(日)二十時より

仏教婦人会例会 令和元年五月十六日(木)十九時半より

正覚寺降誕会 令和元年五月十九日(日)十三時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥